

文化

ルポ 潮流

大阪・釜ヶ崎の異色宿

日雇い労働者の街として知られる大阪・釜ヶ崎に、現代美術家と街の「おっちゃん」が協働してつくった異色の宿がある。昨年オープンした「ゲストハウスとカフェと庭コロシアム」。一体どんな空間なのか。体感すべく、釜ヶ崎を訪ねた。

フリーター・カーロやチェ・ゲバラ、アインシュタインにマリリン・モンロー……。コロシアムの特別室「森村泰昌ルーム」は、まるで小さなギャラリーだ。壁一面が作品ポスターに覆われ、どこを向いても森村さんが扮した「誰か」と目が合う。ポスターの隣にあるのは、地元の日雇い労働者、坂下範征さんによる数編の詩。

「誰かが我より／先に生まれたこと／誰かが我より／先まで生きるということ」
壁に貼られた歴史上の人物たちが、ささやく言葉のようにも読める。
坂下さんと世界的な美術家である森村さんが、ここでは対等の表現者。2人をつない

芸術 全ての生活の中に

美術家とおっちゃん協働



コロシアムの「森村泰昌ルーム」 大阪西成区

だNPO法人「こえとことば」 上田さんが釜ヶ崎の商店街「こえとことば」にカフェを開いたのは2008年。日雇い労働者の高齢化がきっかけで必要とした。11年には、地域の施設を会場に、詩やダンスなどの表現を行うワークショップの「出前」を始める。当初から参加の知恵になると思うんです。増えた。店で待っていてもお

にアルコール依存症になり、断酒を始めたばかりの坂下さんだった。
ワークショップに参加後、坂下さんが「酒は抗酒剤ではなく、人生の楽しみでやめなんだ」と言うのを聞いて、上田さんはハッとしました。

「芸術は全ての生活の中にあっていい。こういう場を、地域にもっと埋め込んでいけませんか」
その翌年、詩や哲学などの講座を無料で開催する「釜ヶ崎芸術大学」(釜芸)を開校した。
森村さんら多彩な講師陣が参加した釜芸は注目を集め、14年には横浜トリエンナーレにも参加。おっちゃんたちの詩や絵画は大反響を呼んだ。しかし、街には新たな変化が押し寄せる。数年前からコ

釜ヶ崎芸術大学(釜芸)の「生徒」であるおっちゃんたちの作品を集めた展覧会「釜芸がやってきた！」が、静岡県三島市の大岡信ことば館で開催されている。笑いあり、涙ありの雑多でパワフルな作品からは「芸術って一体なんだ？」という声がかえってくる。

「学びたい人が集まれば、そこが大学」というコンセプトで始まった釜芸には、詩人の谷川俊太郎さんや、哲学者の齋藤清一さんらも賛同。会場では、おっちゃんたちの「つばやき」を立体化した

コロシアムのある商店街に外国人経営のカラオケ居酒屋が急増。おっちゃんたちの関心や生活費が、仲間との交流よりも娯楽に向かうようになってしまったと上田さんは感じている。
他の支援団体から「この街に芸術なんて」という声が上がったこともある。「どうやってコロシアムや『釜芸』の求心力を保っていくか。正念場です」と上田さんは吐露する。
ゲストルームを訪ねた日、



新潟市中央区の市民芸術文化会館能楽堂で2006年から、能楽の魅力を紹介してきた若手能楽師4人が20日、「スペシャル公演」と銘打ち、能「殺生石」を演じる。これまでの活動は講座が主で、本格的な演能は初めて。4人は「長年の思いが結実した。これまで新潟で勉強させてもらった自分たちの舞台を、ぜひ見てほしい」と感謝する。

シテ方喜多流能楽師の(左から)塩津圭介さん、友枝真也さん、大島輝久さん、佐々木多門さん。4人のコミカルな掛け合いも好評だ。新潟市中央区の市民芸術文化会館

能の楽しみ 次は舞台上

講座解説10年の若手20日に芸文公演

この4人は、喜多流能楽師の佐々木多門さん、大島輝久さん、友枝真也さん、塩津圭介さん。能で主役を演じる「シテ方」で、30〜40代の若手実力派だ。

「殺生石」は、人気の演目の一つ。旅の修行僧が女と出会い、生き物の命を奪うという巨石の話。女が「自分は石の魂だ」と言っている間に、僧が供養をしながら、石が二つに割れ、妖狐が姿を現す。ダイナミックな演出が見どころで、友枝さんは「劇的な要素が高く、幅広い方に楽しんでいただければ」と説明する。

今回シテを務める佐々木さんは「新潟で勉強させてもらい、成長してきた今のわれわれを見てもらえる舞台。楽しみます」と意気込む。3人も後見や地謡で活躍するほか、仕舞「高砂」「田村」「羽衣」を披露。4人の師、塩津哲生さんも仕舞「玉之段」を舞う。解説は歌人の梅内美華子さん。終演後には、出演者のト

佐々木多門さんら4人「長年の思い結実」

「日本文化そのものが、日本人の日常から離れてしまった。伝統に関わる者として危機感がある」。大島さんはこの間を振り返り、普及活動の大切さをかみしめる。
4人は当初、歌人の馬場あき子さん、塩津哲生さんによる基礎講座の一員として関わり始め、13年にバトンを渡された。講座では毎回、一つの演目を取り上げ、装束や能面の解説をしながら観客の前で身に付けてみせるなど、柔軟な発想で能の楽しみを伝えてきた。17年度は4、11、2月に開く。「新潟には、こんなに立派な能楽堂がある。講座が能の公演に興味を持つきっかけになればうれしい」と塩津圭介さん。公演と合わせ、講座への参加も呼び掛けている。
スペシャル公演は午後2時開演。S席4500円、A席3500円、B席3千円、25歳以下2千円。問い合わせは同館、0255(224)5521。

日本的なものの原点に迫る

「応仁の乱」、呉座勇一さん

国際日本文化研究センター助教の呉座勇一さんが、同センター(京都市)で近況を報告した。昨年10月に刊行され、異例のヒ

敗」にこそ学ぶべき点は多いと考えた。

版元によると、既に計18万部を突破。権限が分散され、決定権の所在が不明確なまま戦乱が11年も続いた経緯は、戦中や現代の日本を思わせる。「この本がなぜ売れるのかだって、私にも版元にも分からない。成功と

